

南魚沼市立後山小学校



学校データ

【学級数】

4 学級

【児童生徒数】

14 人

【地域コーディネーターの有無】

有

地域の人々の思いを知り、自分にできることを考える子の育成

1 はじめに

後山小学校は、魚沼市・十日町市に接し、自然が豊かな山間地に位置する。用水不足、地滑り、交通不便といった厳しい環境の中、地域の人々は知恵を出し合い懸命に生きてきた。創立 146 年、地域と歩んできた当校は、平成 21 年に南魚沼市の特認校の認可を受け、学区外からの児童も多数受け入れ、地域住民のコミュニティ活動の拠点となっている。

今年度児童数は 14 名で、一人一人を大切にしたい教育を信条に、互いの個性を認め合い、主体性、社会性、たくましさ伸ばし、自立して中学校へ進めるよう教育活動を展開している。そのために、体験活動や人とのかかわりの機会を保障することを重視している。

校舎に隣接するぶな林で、四季を通して森の活動に浸り学ぶことができること、地域の方々との触れ合いやお話から様々な知見や生き方への考察が得られること等、当校のよさを生かし、子どもたち一人一人の成長に繋げられるよう地域教育プログラムの実践を進めている。

2 取組の実際

(1) あいさつ郵便

高齢者が多数を占める校区(後山地区、辻又地区)の方々に、子どもたちの元気な声を届けたい。そのような趣旨で始ま

った「あいさつ郵便」は、かれこれ 10 年以上も続く当校独自の活動である。

令和元年度までは、3つの縦割りグループに分かれ、各戸を回ってあいさつや会話をしたり、不在宅にメッセージカードを郵便受けに入れたりする活動をしてきた。しかし、令和2年度は、感染症拡大防止のため方法を再考する必要があった。また、住民と共に企画・運営している運動会も、感染症の影響で中止となり、寂しいという声が地域から聞かれていた。

そのような状況を鑑みて、広場で住民と一緒にラジオ体操をしたり距離を取って会話をしたり歌を聞いてもらったりと、新たな「あいさつ郵便」の形を模索した。

今年度も、感染症対策を継続せざるをえず、昨年と同じように広場に集まる形を取ることにし



住民と会話を楽しむ子どもたち

た。地域コーディネーターの方は、住民に日時を知らせる協力をしてくださった。

「やっぱり子どもたちの声を聞くと元気が出るね。」「久しぶりにラジオ体操をやって楽しかった。」といった、昨年聞かれた感想を思い出したり、活動を振り返ったりしながら、子どもたちが全4回の内

容を考えた。その結果、タブレットで作った自己紹介カードを渡して話を広げたり、「もみじ」等、住民にも馴染みのある歌を歌ったり、ダンスを披露したり、より多くの人から集まってもらうためのチラシを作成したりと、子どもたちによる工夫があふれた「あいさつ郵便」を行うことができた。集まった方々も「うれしかった。」「ありがとう。」等と笑顔で子どもたちに声をかけていた。

（２）辻又地区での自然教室

辻又地区は、学校から車で10分ほどの距離にある。以前は後山小学校とは別の学区であったが、平成7年より後山小学校区となった。子どもがいなくなって久しい辻又地区の、旧辻又小学校を舞台に、全校で自然教室を行った。内容は、①辻又川に放流したニジマスをつかみ捕り、それを串刺しにして炭火で焼く、②アルミ缶を使った炊飯と味噌汁作り、③自然の木を使った木工作



自分の食物は自分で手に入れる



素材の形を生かして写真立て作り

（写真立て）の3つである。かつての地域おこし協力隊で、現在も辻又に在住の方に協力を仰ぎ、活動内容の検討、会場下見、参加できる住民の募集に至るまで、全面的に支援をいただいた。4名の住民とボランティア合宿経験者の大学生1名の参加があり、子どもたちの活動を支えてもらった。

子どもたちは、自分が食べるニジマスを手で捕り、包丁を入れて串刺しにした。多くの子は初めての体験で、命をいただくということを学ぶ機会となった。

参加した住民からは、「昔は1日中、川で魚を捕っていたことを懐かしく思い出したよ。」「久しぶりに小学校に元気な声が響いてうれしかった。」「木工作は、子どもならではの発想があって感心した。」等の感想を聞くことができた。

3 成果と課題

及び本実践で育成された資質・能力

「あいさつ郵便」では、昨年よりも、どうしたら住民に喜んでもらえるか相手意識をもって考える姿が増えた。実際の会話では「目を見て話したいな。」「会話が弾むような質問をしよう。」等と自分の目標を明確にして臨み、終了後は「笑顔になってくれて嬉しかった。」「次は子どもの頃の様子を聞いてみたい。」等と振り返る姿があった。地域の方からほめてもらい、自分のよさを見直すことができた。

自然教室では、共に活動する中で、地域の人、地域外から来て住んでいる人、ボランティアとして繰り返し訪れている人それぞれの思いを知り、自分の生き方を考えることができた。そして何より、「楽しかった。辻又の自然もいいなあ。」という子どもたちの地域に寄せる気持ちの深まりがあった。これを今後の活動にどう繋げられるかが次の課題である。

4 おわりに

どちらの活動も、住民に支えられて成立しているが、同時に住民が集い楽しむ機会の提供にもなっている。このような学校と地域との良好な関係を生かしながら、子どもたちが心豊かな時間を過ごし、よりよい生き方を学ぶ地域教育プログラムを継続していきたい。